



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国における文化大革命期の体育思想とサッカー：持続と変容をめぐって [全文の要約]
Author(s)	李, 晋寧
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15802号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92372
Type	doctoral thesis
File Information	LI_Jinning_summary.pdf



博士論文の要約

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：李 晋寧

学位論文題名

中国における文化大革命期の体育思想とサッカー

—持続と変容をめぐって—

本研究は文化大革命期（以下では文革期と略す）の政治思想が生み出した体育思想とサッカーの關係に着目し、1980年以降に至るまでのその影響力の持続と変容の問題を歴史的に明らかにすることを目的とした。

上記の問題を扱う際、同時代史料の欠如が指摘されている。また、通史や外交關係の問題を扱った文革期の体育・スポーツ史研究は存在しているが、サッカーについて詳細に論じる研究はこれまで殆どなされていない。しかも、既存の研究が扱う史料は官報や権威的文書に依拠し、民衆の視点を有するリソースも十分でなかった。また、女子サッカーに関する研究は存在しても、文革期の男女同権思想に論及したものは乏しい。また、中国サッカーの発展の遅れは西欧由来のスポーツの文化的土壌の欠如に起因したという指摘はなされているが、文革期のサッカー文化の実態は不明なままであった。そこで、本研究ではスポーツ雑誌、新聞報道、選手やファンが残した日記や回顧録を渉猟し、先行研究が欠いてきた視点を補うことを試みた。なかでも、史料的欠如の問題を補完する上で、フランスの歴史学者、ピエール・ノラによる「記憶の場」という方法論に依拠し、文革期の体育思想とサッカーの關係性を明晰にすることを試みた。

以下、方法論を含む章立てとその内容について述べる。本論文は第一部と第二部から成る。「第一部 文化大革命期のサッカーと政治思想」は第一章から第三章までの三章から成り、文化大革命の到来と変革によりサッカーに生じた変容を克明にし

た。

すわなち、第一章は『体育文件選編』と『中国サッカー運動史』を基に文化大革命期以前の中国におけるスポーツシステム及びサッカーの発展状態について論じた。中華人民共和国の成立後、中国人民の健康、体力の増強、国家建設と防衛目的で体育・スポーツシステムはすでに構築されていた。「労働衛国体育制度」は段階的に導入され、競技選手の育成と指導者の養成を目的とした「业余体育学校」という教育制度も確立していた。但し、リオーダンや Fan が述べた通り、この時期の中国のスポーツは国家防衛を主な目的とし、ナショナリズムとも結びついたものであった。また、西欧システムを凌駕することを目的とする「超英赶米」思想や旧ソ連に対して警戒する思想ともかかわっていた。また、1955年に成立した中国サッカー協会の指導と管理の下で、全国サッカー大会の規模は成長し、外国チームとの国際交流もすでに盛んであった。しかしながら、大躍進運動により中国のスポーツ発展の人的資源と財政的資源が枯渇し、サッカーの発展は停滞した。この状況を緩和するため、国家の体育管理部門は1964年に新たなサッカーの発展方針を公表し、数多くの都市の学校体育ではサッカーが発展できるようになった。しかし、2年後の1966年に始まった文化大革命の変革により、良好な発展の勢いは頓挫せざるを得ない状況となった。

第二章では、中国の作家、劉斉が書いた『球迷日記（サッカーファンの日記）』（1964-1998）に基づき、文革期の政治とサッカーについて、人民の視点から論じた。文化大革命によって、中国のサッカーの発展は停滞した。階級闘争が至上命令となり、サッカー試合や大会を組織する余裕はなくなり、スポーツ活動を管理し、支援する体育部門も政治闘争活動により改造され、サッカー活動を組織するための人的資源は乏しくなった。サッカーチームが解散され、組織されたサッカー試合も中止となったという。しかしながら、『サッカーファンの日記』は人々とサッカーの関係について、異なる側面を映し出していた。例えば、民衆レベルでのサッカー団体、元サッカーチームのメンバーによる自発的なサッカー試合は行われていた。つまり、民衆がサッカー試合を観戦するようなサッカー活動への参加機会は少なくなっていたが、完全にサッカーと絶縁した状態ではなかったと言える。

また、文化大革命期に、「反帝国主義」と「反修正主義」の思想は外部の脅威の増大に伴って共存し、その時代の民衆の思想と生活に影響を及ぼしたと考えられる。上記の日記の著者、劉斉は苦しい「上山下郷」の生活に耐え兼ね、サッカーは彼にとって「憂いを癒す」手段になったと叙述し、その思いを象徴的な漫画に残した。外国との戦争を契機に、上山下郷運動の辛さが終わることを切望する記述も見られ、外敵との戦争への恐怖すら楽に見えるほどであったと述べている。それゆえ、「ソ連修正主義」に反対する風潮も民衆の思想に強く影響していたこと、高揚したナショナリズムが反映されていたことを示している。したがって、政治的影響を及ぼすと同時に、サッカーが憂いを癒す手段として、密かに「活路」として期待されていたことも明らかになった。

文化大革命期の後半は、「友好第一、競技第二」という体育方針に従うことにより、文化大革命時代のサッカーは外交と階級闘争の手段にもなった。そして、サッカーの意義は外交手段及び階級闘争の手段だけでなく、民衆が中国共産党のリーダーシップを肯定し、政治的に忠誠心を示しつつ、社会主義の体育価値観の確立とその民族精神に対する尊敬を表すことも含むように指導されていた。しかし、日記内容の分析によって、政治思想や政治用語とスポーツを結びつけることに苦しむ事例も発見された。民衆は真剣勝負を含めて、純粹に競技を楽しむというサッカーの文化需要を重視していた。それゆえ、「友好第一、競技第二」の思想と精神はサッカー活動の現実と結合できず、サッカーの発展の抑圧に繋がった側面も映し出されていた。

第三章は1980年に公刊された『体育報』に掲載された「友好第一」思想に対する議論と疑義に着目し、文化大革命期に体育価値観であった「友好第一」思想の歴史的効用の持続力と変容について分析を行った。結果、文化大革命期の親善試合を観戦し、「友好第一」思想の下で、社会主義思想の教育を受け、体育価値観の「友好第一」を信奉した人々は、スポーツは政治のためのもの、いわゆる外交の手段の一つであったと理解し、革命期以後も深く影響されたことが明らかになった。しかし、手加減、八百長試合に嫌悪し、「友好第一」思想は双方が正々堂々と真剣に対戦する競技スポーツの形成を阻害するものであるという考えが1980年代以降に公にされる

ようになったことも示した。以上のことから、文化大革命期の体育思想「友好第一」はそれ以前に存在した中国人民の体育的価値観を解体し、社会主義的体育思想のもとで統合をはかると同時に、1980年代に至っても、根強い影響を残したが、文化大革命期とは異なり、共産党の官報の性格を帯びる『体育報』の中においてすら、堂々とその伝統的考え方に修正を迫る主張が示されるようになったと言える。しかし、こうした持続的側面と変化の兆しの双方において、いずれにしても、「友好第一、競技第二」は文化大革命に植え付けられた思想をもとに、その賛否が議論されたと言う意味で、体育的価値の再建過程に深く影響を与えたと言える。

以上の通り、文化大革命期の前には存在していたサッカー（第一章）が、文化大革命期以後に抑圧されたことを民衆の日常の視点（日記）から炙り出し（第二章）、「友好第一、競技第二」という体育思想の持続と変容の問題を扱う（第三章）。これにより、文化大革命期の政治思想が生んだ体育思想とサッカーの実態解明につなげた（第一部 文化大革命期の政治思想とサッカー）。

「第二部 抵抗とオルタナティヴ」は第四章と第五章の二つの章から成る。

第四章では体育雑誌である『新体育』、サッカー誌である『サッカー世界』に着眼し、女子サッカーを通じて、文革期の政治思想に対する抵抗の姿を明らかにした。文化大革命時代には、男女同権論が普及したが、この平等思想は女性が労働や生産に平等に参加する権利の主張であり、政治的に明確な指向性を有した。とはいえ、この思想は社会環境として女性に配慮がなされていたわけではなく、加重な女性への労働負担がかえって二重苦を強制することにもつながり、今日的に述べるところのジェンダー・バイアスを解消するところまでには至っておらず、その実現には限界も伴っていた。

それにもかかわらず、何故、中華人民共和国の女子サッカーは1979年まで広く普及しなかったのか。ひとつの大きな理由として、文化大革命期が終焉を迎え、改革開放政策の時代が到来し、1978年の改革開放政策により、中国スポーツは新たな時代を迎えた。加えて、外圧も作用した。1980年以降、オリンピックなどの国際的なスポーツ大会で優秀な成績を収めることを目標とし、体育を通じて強国の国際的なイメージを確立し、後の研究者によって、「金メダル主義」と呼ばれた時期の現象

が関与していた。つまり、エリートスポーツが再び重視された。

よって、中国における女子サッカーは 1979 年頃から現れた闘争の結実であったという見方もできよう。但し、古い男性優位思想、文化大革命期の強権的な男女同権思想に対する疑念も、文化大革命期が終わった後、サッカーを介して、段階的に受け入れられるようになった。この過程において、スポーツが政治に利用され、外交的手段となった文化大革命期の様相から少しずつ変化を遂げ、中国における女子サッカーの発展過程において、女性たちが自ら政治思想を利用して女子サッカーを正当化しようとする積極的な行動が見られた。このようにサッカーを通じた政治への抵抗はまだ完全に達成されたわけではなく、今日においてもその闘争過程の中にあると言えるが、文化大革命期の後に生まれた女子サッカーの誕生は古い観念に対するひとつの抵抗の産物であり、同時に新たな時代を象徴する事象であったと言える。

第五章では、ノラによる「記憶の場」に依拠し、文化大革命期を回顧して叙述された自叙伝とサッカー専門雑誌、『サッカー世界』(1980-1989)にみる記憶の歴史を扱い、文革期における個人や集団の記憶を通して、政治思想とサッカーの関係について分析した。結果、国家体育委員会内のサッカーに関するあらゆる業務、サッカー事業の管理部門とナショナルチーム、各省、市チームに至るまで、監督、選手、従業員がサッカーに関する仕事から離れ、数年間の間、勤務を中止せざるを得なくなり、組織的な試合及びトレーニングも中断された。さらに、政治審問に怯え、長期間の生活不安に耐えられなくなり、自殺した人物もあった。つまり、1970 年代にサッカー事業が再開されるようになるまで、中国において、文化大革命期までにサッカーの発展のために尽力した人々は強いダメージを受けた。それゆえ、1980 年代に革命期を回顧したサッカー関係者は文化大革命期の階級闘争に深く影響されたことを集団の記憶として共有したことが明らかになった。とりわけ、代表チームを率いた年維泗監督はかつてのことを振り返った際、「友好第一、競技第二」思想の影響及び「友好第一」思想に対する批判的見解を述べた。さらに、当時の競技水準が高かった強豪チームとの交流を失った。これは中国サッカーの発展の醸成を遅らせた要因の一つであったと回顧された。

以上は、サッカー関係者の記憶の断片から引き出された集合記憶に基づく。ノラの言う「記憶の歴史」とは「実際に起こったこと」の真偽を問うことよりも、出来事がたえず再利用されたり、誤用されたりして、現在に引き継がれるその影響に注目するものに他ならない。リクールによれば、「記憶」それこそが「歴史の母体」なのであり、「歴史に巻き込まれる」というのは記憶の宿命と述べた。この意味で、文化大革命時代のサッカーについても、歴史認識と現在の関連性が人々の記憶を通して、接合され、構築されたと言える。それ故、記憶の中に現れた文化大革命期の体育思想と政治思想に対する否定は、集合記憶を通じた誇張であるか否かにかかわらず、再び 1980 年代の記憶の歴史という時代認識につながっている。中国におけるサッカー関係者の 1980 年代における集合記憶は「文化大革命期のサッカーの停滞を負の遺産」と認識するものであった。

つまり、第二部では、体育思想に対する変容および抵抗の問題を扱う上で、文化大革命期以前には存在しなかった女子サッカーに着眼し、最も特徴的な変容と抵抗の例を示し（第四章 共産主義下の強権的男女同権と女子サッカーの発展—その功罪—）、次いで、第二章の日記の中では語り尽くせなかった民衆の本音と抵抗を 1980 年代以降のサッカー関係者の記憶から読み解くことで第一部を補完し（第五章 個人史による記憶—自叙伝、雑誌『サッカー世界』（1980-1989））、体育思想に対する抵抗とオルタナティブを示す。以上の二部構成により、持続と変容の全容を捉えた。

以上の二部からなる本論の結論は次の通りである。第二章で述べた通り、表向きには文化大革命期の 1970 年代に階級闘争への貢献を否定できなかった一方で、その価値観は「スポーツの実態とうまく結合できなかった」と記述された矛盾した日記の叙述と、後に集団記憶として公的に表明された「友好第一」体育思想に対する抵抗が、1980 年代に溶け合う記憶の歴史であったと言える。つまり、文化大革命期の思想が持続力を行使したために史料からは意図的に消去され、書き残すこともできなかった。にもかかわらず、改革開放の時代に記憶が蘇り、反論として立ち現れた。それが変容のひとつであった。しかし、第三章で述べた通り、なおも「友好第一、競技第二」を支持する人々も同時に存在していた。アルブヴァクスによれば、その

記憶喪失を回避し、記憶を刻印する重要な時期が改革開放の時代、Fan Hong らが説明する国際的なスポーツの舞台における「メダル熱」の時代であったということになる。

この複雑さについて、本研究では、1960 年代に密かに書かれた日記、1980 年代になっても根強い道德規範であり続けた「友好第一、競技第二」思想、同時に 1980 年代にみられた体育思想に対する批判が織り交ざる形で生まれた記憶によって、文化大革命期のサッカーと思想に対する否定が醸成されたことを明らかにした。また、古い思想に対する抵抗は、男子よりも女子サッカーを通じて、新たなパースペクティブを構築したともいえる。

さらに、以上の結論は別角度からも深められる。「スポーツとは何か」、「スポーツの本質である遊戯性が中国におけるサッカーにはあったか」という根源的な問いにも本研究の結論は貢献するものがある。文化大革命期の体育思想とサッカーが有する「遊戯性」は次のように考察できる。中国のサッカーは 90 年代のプロ化以来、スポーツ文化として観衆に消費されているが、精神文化としてのサッカーの成熟を伴わなかった。文化大革命期の体育において、画一的、権威的な価値観と理念が確立されたことによって、多様な精神文化が民衆に受容されるタイミングが損なわれたように思われる。文化大革命期のサッカーというスポーツは、競技性と娯楽機能が十分に重視されず、スポーツの遊戯的本質から部分的に切り離れており、無産階級の政治的効用を果たすための体育活動に過ぎなかった。サッカーから受容できる民主的な精神文化が抑圧されたことは、遊戯論としてのスポーツ、サッカーの発展の醸成が遅れた原因の一部と考えられよう。この論点から、文化大革命期の中国におけるスポーツ史の全体像は「遊戯性の欠如」の観点からも言及する必要があるように思われる。第二章で述べたように、『サッカーファンの日記』の中には、政治的動乱の最中であつたのにもかかわらず、サッカーファンが政治的効用から離れて、スポーツの本質を楽しんでいた心理が描かれていた部分もあり、その点は注目に値する。そして、第五章で述べた通り、「もし、彼がここにいたならば」という 1980 年代の回顧録が残した言葉の通り、こうした遊戯性を楽しむサッカーの構築は文化大革命がなければ、もっと早くから醸成していたはずであるという人々のサッカーに

対する熱い思いが未来に伝えられたと考えられる。

なお、文化革命期からの体育思想の変容は、2024年1月9日にCCTVで放映された中国サッカーの汚職事件に関するドキュメンタリー（『一体推進「三不腐」』第4回）を通じて、近年、中国のサッカー関係者による汚職や収賄などの事件が公にされ、広範な影響を与えた。これは疑いなく、将来的に中国のサッカーに対する改革への要求を再び頂点に押し上げる兆候であるかもしれない。